

# 児童虐待対応テーマに

## 県小児保健会が初シンポ

県小児保健会（会長・荒川浩一群馬大学教授）の13年度総会・研究集会が5日、約90人が参加して群馬会館で開かれ、13題の研究発表と「ぐんま小児保健賞」の表彰を行った。

今回は初の試みとして

シンポジウムを実施。「児童虐待対応における関係機関の役割と連携を考える」をテーマに、県西部児童相談所、前橋市福祉部こども課、群馬大学医学部附属病院小児科が取り組みを発表した。

前橋市は、児童虐待防

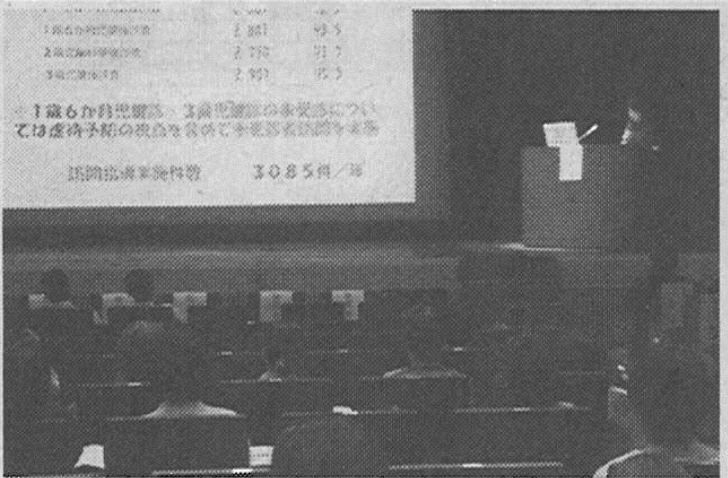
りやすくし、役割分担を明確にしたことで虐待対応がスムーズになったとした。

群馬大学医学部附属病院では、院内こども虐待防止ネットワーク（CAPS）を組織。虐待対応マニュアルを作成し、早期発見、早期介入を図る取り組みを紹介した。

座長を務めた済生会前橋病院の溝口史剛小児科部長は、県内の児童虐待通告割合が全国と比べ低いことを指摘。「通告の義務をきちんと果たしているか」と注意を促した。

発表をまとめた「妊産婦と乳児の健康と生活に関する調査報告書」を発表した。また専門職同士の連携を取

受賞者は次の通り（敬称略）。阿部惇子（県助産師会）、手島嘉子（前橋市）、長嶋完二（ながしま小児科）、林泰秀（県立小児医療センター）、古市玲子・割田直美（県



前橋市は母子保健と統合し取り組みを発表した。写真は前橋市福祉部こども課の職員が発表している様子。